

〈研究・調査報告〉

看護学生の高齢者疑似体験による学び —専門職連携教育と看護学部単独教育の比較—

熊谷 玲子 ・ 川久保悦子 ・ 井上 映子

I. はじめに

医療の高度化、疾病構造の変化に伴い、チーム医療の重要性が増すとともに、超高齢社会の到来に際して、地域包括ケアの観点においても多職種が連携・協働する必要性が謳われている。

大学教育においては、社会の要請と文部科学省による教育の方向性を受け、学生のうちから多職種連携・多職種協働を意識した教育として、専門職連携教育（Interprofessional Education：以下 IPE）が推進され、現在では多くの大学が着手している。目的として、コミュニケーション能力の育成や他の医療専門職についての深い理解など（前野，2014）が挙げられており、各専門職に対する理解向上に効果があった可能性（小野ら，2017）が報告されている。また、看護学生のレポートから「多職種間で連携・協働することの意義を実感できたようである」との報告（板倉ら，2014）もある。

本学では、2011年より薬学部と福祉総合学部による IPE を開始し、2012年に看護学部の開設に伴い看護学部を含めての IPE が実施され、他職種の理解を深めた（鈴木ら，2012）との報告がされている。さらに、2016年度より理学療法学科の開設に伴い、理学療法学科を含めた専門職を目指す4学科協同での IPE が実施されている。2018年度においては、「高齢者疑似体験をもとに、異なる専門分野のそれぞれの視点で、生活者を意識した高齢者への援助や支援の方法を討議し、共有することで理解を深める」というねらいのもと、IPE 高齢者疑似体験を実施した。

高齢者疑似体験とは、シミュレーターを装着して、高齢になった時の身体的機能低下や心理的变化を疑似的に体験することであり、高齢者看護においては、対象の理解を深める教育方法として、多く取り入れられている。その学習効果として、高齢者役を通しての高齢者の身体の変化の理解（岡本ら，2013）や高齢者の日常生活行動の困難さを体験し、高齢者に対する受容的な心理的理解が高まる（小林ら，2011）などが報告されている。また、体験前後の変化において、高齢者に対する意識・態度・行動が肯定的・共感的・支援的な方向へと変化する傾向がみられた（清水，2001）との報告もある。

しかし、2019年度は、高齢者疑似体験の演習環境を検討し、IPE においては、高齢者疑似

体験のシミュレーターを装着して体験できる学生数に限界があるなどの理由により、看護学部内で高齢者疑似体験を実施する運びとなった。これを機に、IPE での高齢者疑似体験による学びと看護学部内での高齢者疑似体験による学びの内容と特徴が明らかにでき、各演習の有用性が検討できると考える。

今回の研究では、3 学部合同による IPE 演習と看護学部単独教育の中で展開する高齢者疑似体験による学びを明らかにし、各演習の有用性を検討することで看護学生の高齢者理解を深めるための演習技法の基礎資料とする。

Ⅱ. 方 法

1. 分析対象

A 大学 2018 年度（109 名）および 2019 年度（104 名）3 年次、高齢者疑似体験後の演習学びのレポート

2. 演習の概要

1) IPE における高齢者疑似体験（2018 年度）

(1) テーマ

「福祉総合学部・看護学部・薬学部協同での IPE 高齢者疑似体験を通じた学習」

(2) ねらい

福祉総合学部・看護学部・薬学部の各学生からなる混成グループにおいて、加齢現象を疑似体験するなかで高齢者の心身の状態や日常生活を考える。高齢者疑似体験をもとに、異なる専門分野のそれぞれの視点で、生活者を意識した高齢者への援助や支援の方法を討議し、共有することで理解を深める。

(3) 演習方法

①グループ編成

3 学部 4 学科〔薬学部（114 名）、福祉総合学科 TA（12 名）、理学療法学科（65 名）、看護学科（115 名）〕計 306 名、4 学科混成チームとし、1 グループ 10～11 名、計 28 グループで演習を行った。

②演習内容

a. 高齢者疑似体験

1 グループを半分に分け、5～6 名のグループで実施した。

<進め方>

- ・グループ内で役割を決め実施する。
- ・高齢者疑似体験者は、体験セットを装着して指示された作業（室内作業、屋外作業）（表 1）を行う。

- ・介助者は、高齢者疑似体験者が安全に体験できるように配慮し、必要があれば介助する。
- ・観察者は、体験者に聞いたこと、気づいたこと、および高齢者疑似体験セットを装着したことにより予測できる機能の低下した状態等について気づいたことをメモする。また、安全性や時間の管理も行う。

b. グループ討議・全体発表

高齢者疑似体験を実施した後に「日常生活場面を想定し、支援方法を考える」というテーマで、グループごとに討議を行い、全体で発表する。

c. 発表後、「高齢者疑似体験を通して学んだこと」のレポートを記述する。

2) 看護学部単独による高齢者疑似体験 (2019年度)

(1) テーマ

「高齢者疑似体験」

(2) ねらい

加齢現象を疑似体験するなかで高齢者の心身の状態や日常生活を考える。高齢者疑似体験をもとに、生活者を意識した高齢者への援助や支援の方法を討議し、共有することで理解を深める。

(3) 演習方法

①グループ編成

看護学科 110 名を 1 グループ 6~7 名とし、計 18 グループで演習を行った。

②演習内容は、上記 1) IPE における高齢者疑似体験 (2018 年度) の<進め方>、

b.グループ討議・全体発表に同じ

表 1 高齢者疑似体験 作業内容

A. 室内作業

各グループ、下記 1~6 のうちから 2 項目ほどの作業を実施する。

なお、それぞれのグループで実施する作業項目は、封筒で配布された(無作為抽出)指示書に従う。

1. 「高齢者と薬」 [必要物品：問診票、添付文書、箱入りの医薬品数種]

- ・問診票の記入 (適正な問診票の条件を考える。)
- ・添付文書を読む。(高齢者に必要な配慮を考える。)
- ・薬を箱や薬袋から取り出して、必要な個数だけ PTP シートから取り出す。(包装容器の扱いや錠剤の色の判別から工夫を考える。)

2. 「高齢者の情報源-1 (目からの情報)」 [必要物品：新聞 (数社)、週刊誌や本類 (数冊)]

- ・いくつかの新聞社のものを比べて、読み易さの相違を知る。(文字サイズや配色による認識差を考える。)

- ・週刊誌（複数）、文庫、単行本、辞書などを見比べて読み易さを考える。（文字・写真のサイズや配置の配慮の必要性を考える。）

3. 「高齢者の情報源-2（耳からの情報）」 [必要物品：ラジオ]

- ・ラジオの操作（各棟廊下に設置）と聞きやすい音量の確認。（微細な操作と聞き取りやすい音量を考える。）

4. 「高齢者と買い物」 [必要物品：財布類、お金（札・小銭数枚）、カード類、品物記載の色紙]

- ・お金、カードを取り出す。（財布の形状による相違を知り、小銭の扱いを考える。）
- ・品物の判別（品名が書かれた紙を使い、文字色や紙色による認識の相違を考える。）

5. 「高齢者の身支度」 [必要物品：前ボタンのシャツ、かぶり物などの衣類]

- ・前ボタンのシャツの脱ぎ着および、かぶり物（ポンチョ）の脱ぎ着を比較する。（高齢者に適した衣服のアイデアを考える。）

6. 「高齢者の食行動」 [必要物品：大豆、皿、箸（工夫された箸）、ペットボトル]

- ・大豆などの食材のつまみ動作の難しさを体験し、そのための工夫を考える。
- ・ペットボトルのふたを開け、コップに水を注ぐ。その動作の難しさを体験し、工夫を考える。

B. 室外作業

以下のルートで歩行し、特に<注目する点>を考えながら体験する。

【外出体験ルート】

・晴天時

スタート（N棟3F：2Fグループは3Fへ昇る）→3Fの通路を渡る→H棟3Fの看護学部ラウンジ前の階段でJ棟1Fに降りる→J棟1F自動販売機の前で硬貨の投入を体験→出入り口から庭へ出る→N棟1Fに入る→エレベーターでN棟3Fへ（2Fグループは2Fへ）上がる。

<注目する点>

階段の降りにくさ、スロープ（下り）の足の動き、階段の見え難さ。途中の非常灯等の認識の様子、エレベーターの表示の見え難さ、および風景の変色を意識する。

・雨天時

スタート（N棟3F：2Fグループは3Fへ昇る）→3Fの通路を渡る→H棟3Fの看護学部ラウンジ前の階段でJ棟1Fに降りる→J棟1F自動販売機の前で硬貨の投入を体験→N棟1Fに入る→エレベーターでN棟3Fへ（2Fグループは2Fへ）上がる。

<注目する点>

階段の降りにくさ、スロープ（下り）の足の動き、階段の見え難さ。途中の非常灯等の認識の様子、エレベーターの表示の見え難さ、および風景の変色、雨天時の足元の危険を意識する。

3. 分析方法

Text Mining Studio Ver.6.1 を用い、単語頻度解析、係り受け頻度解析、注目語情報分析、特徴語分析を行った。

4. 倫理的配慮

研究対象となる学生には、研究の主旨と参加・辞退の保証（承諾するか否かにかかわらず個人が不利益を被ることはないこと）、匿名性の保持、情報管理、結果の公表方法等の内容を口頭と文書で説明した。

本研究は、城西国際大学研究倫理委員会の承認を得た（承認番号 03H190062）。

Ⅲ. 結果

『3 学部合同演習における学びを』以下『IPE』とし、『看護学部教育における学び』を以下『看護学部教育』とする。

1. 記述内容の基本情報（表 2）

『IPE』、『看護学部教育』それぞれにおける記述内容の基本情報は、表 2 の通りであった。総行数は、分析対象者のレポート数であり、全てにおいて『IPE』の方が、『看護学部教育』よりも多い結果となっている。

表 2 記述内容の基本情報

項目	『IPE』	『看護学部教育』
総行数	109	104
平均行長（文字数）	1253.6	1165.6
総文章数	2227	2183
平均文章長（文字数）	61.4	55.5
延べ単語数	28778	25495
単語種別数	3691	3402

2. 「単語頻度」分析結果（表 3）

単語頻度分析結果は、表 3 の通りであった。『IPE』と『看護学部教育』それぞれ上位は「高齢者」「考える」「感じる」「体験」「高齢者疑似体験」「視野」であり、順位の差はあるものの両者に共通していた。原文において、「感じる」では、「恐怖や不安を感じる」「難しいと感じる」「不自由を感じる」等が多く、「体験」では、「日常生活を体験した」「体験を通して学んだ」が、「視野」では、「視野が狭い」「視野が悪い」等の記述が多くみられた。

表3 「単語頻度」分析結果

『IPE』			『看護学部教育』		『IPE』			『看護学部教育』	
No.	単語	頻度	単語	頻度	No.	単語	頻度	単語	頻度
1	高齢者	108	高齢者	104	11	援助	74	生活	78
2	考える	98	視野	97	12	生活	69	困難	76
3	高齢者疑似体験	95	感じる	96	13	狭い	68	身体	71
4	感じる	91	考える	86	14	困難	68	歩行	71
5	体験	86	体験	85	15	低下	67	人	68
6	視野	85	高齢者疑似体験	84	16	学ぶ	65	行う	67
7	必要	83	思う	84	17	自分	61	自分	66
8	階段	82	狭い	81	18	視点	60	学ぶ	63
9	行う	79	必要	81	19	身体	59	大切	57
10	思う	76	階段	79	20	歩行	59	色	55

3. 「係り受け頻度」分析結果（表4）

係り受け頻度分析結果は、表4の通りであった。『IPE』、『看護学部教育』それぞれ上位「視野－狭い」「必要－考える」「階段－昇降」「時間－かかる」「声－かける」は両者に共通であった。原文において、「必要－考える」では、「工夫する必要があると考える」「～などの援助が必要であると考え」等の記述が多く、「高齢者の特性をよく理解しておく必要があると考える」との記述もあった。「時間－かかる」では、「～の動作に時間がかかる」との記述が多かった。「階段－昇降」では、「階段の昇降は難しい」「階段の昇り降りを介助するときは」等が、「声－かける」では、「声をかけることで安心感につながる」「声をかける際は」等の記述が多かった。

係り受け頻度の上位において、『IPE』にのみ出現していたものは、上位から「高齢者疑似体験－行う」「援助－必要」「自尊心－低下」「視野－入る」等であり、原文において「援助－必要」では、「どのような援助が必要か」が多く、「自尊心－低下」では、「自尊心の低下につながる」「自尊心の低下を防ぐために」等の記述が多かった。『看護学部教育』にのみ出現していたものは、上位から「高齢者－とる」「薬－取り出す」「身体－重い」等であり、原文において「高齢者－とる」では、「高齢者にとっては負担が大きい」「高齢者にとっては困難なことが多い」等が、「薬－取り出す」では、「薬を取り出す場面では」が多かった。

表4 「係り受け頻度」分析結果

『IPE』			『看護学部教育』			『IPE』			『看護学部教育』		
No.	係り元単語-係り先単語	頻度	係り元単語-係り先単語	頻度	No.	係り元単語-係り先単語	頻度	係り元単語-係り先単語	頻度		
1	視野-狭い	57	視野-狭い	70	11	視野-入る	20	薬-取り出す	17		
2	必要-考える	35	階段-昇降	48	12	必要-感じる	18	工夫-必要	16		
3	階段-昇降	34	時間-かかる	38	13	視力-低下	16	身体-重い	16		
4	時間-かかる	32	声-かける	33	14	工夫-必要	15	生活-送る	16		
5	高齢者疑似体験-行う	29	必要-感じる	28	15	援助-考える	14	お金-取り出す	14		
6	声-かける	24	必要-考える	25	16	高齢者-生活	14	階段-降りる	14		
7	援助-必要	22	困難-感じる	23	17	高齢者-体験	14	お金-出す	13		
8	高齢者-感じる	21	高齢者-感じる	20	18	困難-感じる	14	ペース-合わせる	13		
9	自尊心-低下	21	高齢者-生活	19	19	低下-つながる	14	恐怖-感じる	13		
10	生活-送る	21	高齢者-とる	17	20	介助-必要	13	高齢者疑似体験-体験	13		

4. 「注目語情報」分析結果（表5）

単語頻度の上位にある「考える」を注目語情報分析した結果は表5の通りであった。

『IPE』では、「必要-考える」「大切-考える」「援助-考える」「つながる-考える」「視点-考える」が上位であった。『看護学部教育』では、「必要-考える」「良い-考える」「つながる-考える」「大切-考える」「重要-考える」であった。両者の違いとして、『IPE』には「視点-考える」があり、原文において「専門分野の視点で考える」、「様々な視点で考える」「看護の視点で考えると」等の記述が多かった。

表5 「注目語情報」分析結果

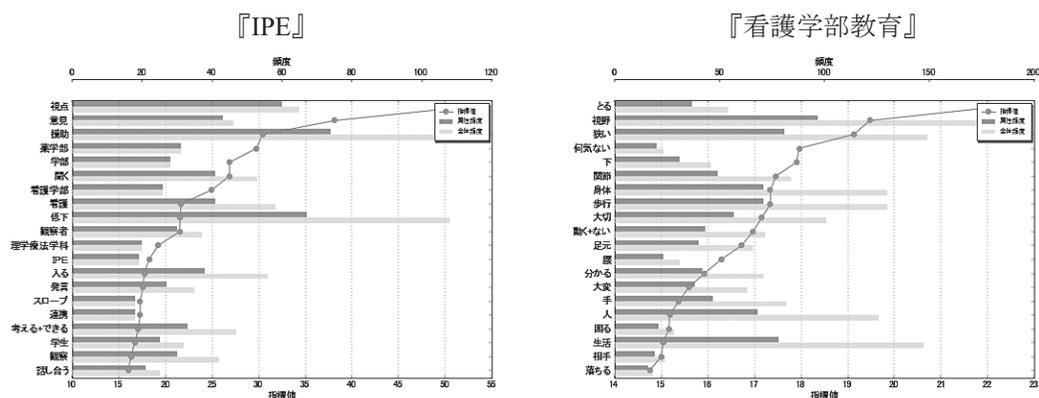
『IPE』			『看護学部教育』		
No.	係り元単語-係り先単語	頻度	係り元単語-係り先単語	頻度	
1	必要-考える	35	必要-考える	25	
2	大切-考える	15	良い-考える	15	
3	援助-考える	14	つながる-考える	14	
4	つながる-考える	13	大切-考える	14	
5	視点-考える	13	重要-考える	12	
6	リスク-考える	11	リスク-考える	8	
7	低下-考える	10	可能性-考える	8	
8	良い-考える	10	体験-考える	6	

5. 「特徴語」分析結果（図1）

特徴語分析結果は、図1の通りであった。特徴的に出現する単語の偏りを指標値で表しており、『IPE』で指標値の高い単語は、「視点」「意見」「援助」「薬学部」「学部」「聞く」「看護学部」であり、『看護学部教育』では「とる」「視野」「狭い」「何気ない」「下」「関節」であった。『IPE』において指標値の高かった「視点」において、原文からは、「それぞれの視点があり」「看護の視点だけでなく」「高齢者の視点で」等が多かった。「意見」においては、「様々な意見がでた」「多職種の意見を受け入れて」「他の学部と意見を交えて」「意見が対立するこ

とがある」などという記述が多かった。また、「意見を聞いた時に、チーム医療の重要性を実感した」という記述もあった。「薬学部」においては、「薬学部の学生は薬の一包化について」等の記述が多かった。「学部」においては、「他学部とのグループワークにより」「他学部と共に考える」が多かった。『看護学部教育』において指標値の高かった「とる」において原文からは、「高齢者にとっては」「コミュニケーションをとること」等が、「視野」においては、「視野が悪い」「視野が狭い」等が、「何気ない」においては、「何気なく行っている動作」が、「下」においては、「下を向いて」「下が向きづらい」が、「関節」においては、「関節が曲がりづらい」等が多かった。

図1 特徴語分析結果



IV. 考 察

1. 『IPE』による学びの特徴

単語頻度分析結果の上位は、「高齢者」「考える」「感じる」「高齢者疑似体験」「体験」「視野」であり、それぞれの原文から、学生は、体験を通して感じた視野の狭さや恐怖・不安などを感じていた。また、係り受け頻度分析結果の上位は、「視野-狭い」「必要-考える」「階段-昇降」「時間-かかる」「声-かける」であり、それぞれの原文から、動作に時間がかかること、階段昇降時の難しさや危険性等を感じ、高齢者の特性を理解する必要性、援助内容を工夫する必要性や声をかけることの大切さに気づいていた。これらのことは、高齢者の日常生活行動を疑似体験し、強く印象に残った感覚やその際に感じた高齢者の気持ちを表現しており、高齢者の身体の変化やそれに伴う日常生活行動の困難さおよび心理面への影響の理解につながったと考える。また、体験者や介助者の観察からも、高齢者に対する受容的な受け止め方や具体的な支援内容の考察につながったと考える。

単語頻度分析結果の上位にある「考える」を注目語分析した結果から、『IPE』にのみ「視点-考える」があり、原文から、様々な視点、看護の視点、それぞれの専門分野の視点での

考えとして認識したことが分かる。このことから、専門分野の異なる他学科の学生と同じ場面で体験したことについて討議した結果、それぞれの専門分野において考え方の視点が違うことや看護の視点だけでなく様々な視点があることに気づいたと考える。

係り受け頻度分析結果において、『IPE』の上位にのみ出現していた「援助ー必要」「自尊心ー低下」において、原文から、必要な援助内容の検討や自尊心の低下を防ぐための関わりに注目したことが分かる。このことは、他学科の学生との視点の違いを感じ、専門性の違いとして看護の大切な視点である援助や自尊心について説明することにより、看護の役割としての認識が表現された結果であると推察する。

特徴語分析結果において、『IPE』では、「視点」「意見」「援助」「薬学部」「学部」「聞く」の指標値が高く、この演習での学びの特徴である。それぞれの原文から、他学部との混成チームでのグループワークにおいて意見交換することで学生は、それぞれの専門領域における考え方の特徴を知り、それらが自分たち看護との視点とは異なることや、専門性を出し合うことにより意見の対立となることがあるが、それぞれの意見を受け入れて連携することの大切さも感じている。これらのことから、学生は、他学部の学生の意見を聞き、他者の考えと比較しながら意見を述べることで、学部ごとに特徴があることや様々な考え方があることに気づく。また、多職種である他の専門分野を学ぶ学生で構成されたグループでの討議であることから、援助内容など自分たちの専門性を発揮しながら説明することで、改めて自分の職種専門性や役割に気づくことができる。

さらに、臨床の場をイメージし、専門職種での意見の違いが対立につながる可能性も感じ、連携するためには互いの意見を尊重し、専門領域の特徴や役割を理解することがチーム医療につながるなど、物事を深く思考する機会になったと考える。

したがって、『IPE』の演習方法において、当演習のねらいである「加齢現象を疑似体験するなかで高齢者の心身の状態や日常生活を考える。異なる専門分野のそれぞれの視点で、生活者を意識した高齢者への援助や支援の方法を討議し、共有することで理解を深める。」については達成可能と考える。

さらに、IPE の目的である、コミュニケーション能力の育成や他の医療専門職についての深い理解など（前野，2014）についても到達可能であり、多職種間で対象のことを多角的にアセスメントすることで対象に合ったケアを考え、生活の質を高めることやチーム医療の意義も感じることでできる有用な演習方法であると考えられる。

2. 『看護学部教育』による学びの特徴

単語頻度分析結果および係り受け頻度分析結果における上位の単語は、『IPE』とほぼ同様であり、『IPE』による学びの特徴でも述べたように、高齢者の日常生活行動の疑似体験を通して、高齢者の身体の変化を感じ、心理面を含めて理解を深め、具体的な支援内容を考えることができている。

係り受け頻度分析結果において『看護学部教育』にのみ出現していた「高齢者—とる」「薬—取り出す」「身体—重い」において、原文から、高齢者にとって困難なことや負担になることを薬の服用という高齢者の日常に欠かせない場面に注目して考えていることが分かる。

特徴語分析結果からは、「とる」「視野」「狭い」「何気ない」「下」において指標値が高かった。原文から学生は、高齢者疑似体験を通して、普段何気なく行っている動作から、視野の狭さや下を向きづらいなどに強い印象を受け、高齢者にとっての危険につながる行動を考えている。これらのことから、看護を専門に学ぶ学生同士のグループワークでは、体験による行動や行為を共通認識しやすく、より具体的な内容の討議につながったことが考えられる。また、座学で高齢者の特徴や援助に関して、既に学んでおり、疑似体験により高齢者に特徴的な場面について丁寧に考える機会となった。また、疑似体験を行う当事者の人数は『看護学部教育』のほうが多く、この体験者数の違いにより、強く受けた印象が数多く表現されたことも影響していることが推察される。

したがって、当演習のねらいである「加齢現象を疑似体験するなかで高齢者の心身の状態や日常生活を考える。高齢者疑似体験をもとに、生活者を意識した高齢者への援助や支援の方法を討議し、共有することで理解を深める。」については達成可能と考える。

3. 『IPE』『看護学部教育』の各演習の有用性と課題

『IPE』と『看護学部教育』では、それぞれの演習方法として、「体験」と「グループワーク」を活用した。

体験においては、場を共有し同じ体験をすること、共に行動・援助することで気づきと理解が深まり、また、行動を共にしたことから、場の状況が共有でき、発言しやすく、具体的な意見として述べられ、グループワークの活性化につながったと考える。

グループワークは、ディスカッションなどを通してコミュニケーション力を培ったり、合意形成を体験したりする機会となるが、クリティカルシンキングの習慣や新しいリーダーシップを培うために必要な事柄を学ぶ契機も十分に備えている(三浦, 2018)とされている。これらのことから、高齢者疑似体験の演習においては、体験とグループワークを併用する演習方法を用いて、その課題を共有し、具体的な意見交換ができ、互いの考え方や理解を深めることができる。

今後の課題として、演習目的に応じたグループワークの企画・運用方法を検討する必要がある。

『IPE』では、高齢者の理解や支援内容だけでなく、専門領域の異なる学生間でのグループワークにより視野を広げつつ、それぞれの役割や連携の必要性にも目を向けることができる。さらに、討議のテーマや運営方法を検討することによって、高齢者の支援に向けて多職種間での合意を目指した具体的な支援内容の考察までもねらえると考える。

『看護学部教育』では、学生の疑似体験を活かし、高齢者の理解や看護の視点で援助内容を

考えることができる。高齢者への支援内容の深まりを期待するのであれば、多角的に検討できる討議のテーマや運営方法の検討が必要であると考ええる。

V. 結 論

『IPE』『看護学部教育』各演習方法において、それぞれの学びの内容から、目的は達成可能である。また、各演習の有用性と課題が明らかになり、看護学生の高齢者理解を深めるための演習方法についての示唆が得られた。

本研究の限界と課題

本研究は TM ソフトウェアを用いて、テキストデータから知見を発見する分析方法であり多量のデータを分析でき再現性も確保できるが、少数の貴重なデータが取り上げられない可能性がある。今後の課題として、少数のデータも大切に、学生の学びを深めていけるような分析方法も併せて研究する必要がある。

【文献】

- 相羽利昭, 山村江美子, 板倉勲子 (2003) : 高齢者疑似体験による高齢者のイメージと高齢者理解の変化—看護学生の高齢者イメージの自由記述の内容分析から—, 聖隷クリストファー大学看護学部紀要, 11 号, 119-126.
- 板倉勲子, 安原智久, 辻琢己他 (2014) : 看護学部—薬学部専門職連携教育の取り組みについて, 摂南大学看護学研究, 2 (1), 57-67.
- 今井多樹子, 高瀬美由紀, 佐藤健一 (2018) : 質的データにおけるテキストマイニングを併用した混合分析法の有用性—新人看護師が「現在の職場を去りたいと思った理由」に関する自由回答文の解析例から—, 日本看護研究学会雑誌, 41 (4), 685-700.
- 小野真理子, 畠山恵, 小俣智子他 (2017) : 医療福祉系 4 学科における専門職連携教育の試み—むさしの IPE 活動報告 第 1 報—, 言語聴覚研究, 第 14 巻第 3 号, 290.
- 岡本紀子, 高田大輔, 泉キヨ子 (2013) : 高齢者疑似体験における体験と観察を通しての看護系大学 1 年生の気づき, 帝京科学大学紀要, 9, 139-145.
- 加藤尚子, 山口佳子, 降旗光太郎, 橋本光康 (2017) : 多職種連携教育における学生の実習経験の解析, —テキストマイニング分析による可視化の試み—, 日本医療マネジメント学会雑誌, 18 (3), 141-146.
- 川崎彰子, 千葉京子 (2004) : 看護基礎教育における高齢者疑似体験の学習効果—小グループでの討議記録を質的に分析して—, 日本赤十字武蔵野短期大学紀要, 17, 21-27.

- 河野高志(2018):地域包括ケアシステムにおけるケアマネジメントとインタープロフェッショナルワークの可能性, 福岡県立大学人間社会学部紀要, 26 (2), 37-53.
- 小林美奈子, 関千代子, 澤見一枝 (2011):看護学生の高齢者疑似体験の演習効果・日常生活行動への心理的理解の検討, 日本看護科学学会学術集会講演集, 31 回, 434.
- 酒井郁子 (2017):医療職種教育に及ぼす IPE の影響と薬剤師に期待すること 看護師の視点から, 薬学雑誌, 137 (7), 869-877.
- 清水洋子, 小野奈津子, 福島道子 (2001):看護学生における高齢者疑似体験の取り組みと学習効果—インスタント・シニア・プログラムを導入して—, 日本在宅ケア学会誌, 14 (3), 55-61.
- 鈴木明子, 井上映子, 坂下貴子他 (2012):Interprofessional Education (IPE) プログラム実施報告—看護学生の気づきと学び—, 城西国際大学紀要, 21 (1), 83-94.
- 服部兼敏 (2010):テキストマイニングで広がる看護の世界, ナカニシヤ出版.
- 藤井博之 (2018):IP の基本と原則, 協同医書出版社.
- 藤巻尚美, 流石ゆり子, 牛田貴子 (2008):『健康高齢者実習』プログラムに高齢者疑似体験を組み入れた学習効果 (第2報)—高齢者の活動性・自立性のイメージに焦点をあてて—, 山梨県立看護学部紀要, 10, 93-101.
- 古市清美, 高橋ゆかり, 鹿村真理子, 兎澤恵子 (2011):早期体験演習による看護学生の老年看護に関する学び, 上武大学看護学部紀要, 第6巻第2号, 20-27.
- 前野貴美 (2014):II-1 筑波大学における専門職連携教育の取り組み—大学間連携により展開する専門職教育プログラム—, 医学教育, 45 (3), 135-143.
- 前野貴美 (2015):専門職連携教育, 日本内科学会雑誌, 104 (12), 2509-2516.
- 三浦真琴 (2018):グループワークその達人への道, 医学書院, 4-12.